

■ウィンド Etc. (風のエトセトラ)

風の哲学者 -Wind Philosopher-

風力発電が繋ぐ仲間たち

Garrad Hassan (DNV GL) 内田行宣

風の哲学者

我々の仲間のあいだで、マークは「風の哲学者」と呼ばれていた。いつも眉根を寄せて、ただでさえ彫りの深い顔が一層深刻に見えた。鼻の下も顎も髭だらけである。勿論、髭はもみ上げと繋がっている。

しかし、マークが風の哲学者と呼ばれた所以は、何もこの風貌のためだけではない。彼には、「哲学」と呼べる自己主張が常にあったからだ。

彼はウインドファームのオペレーターとしては当代一流であった。風況、空力、機械、電気、通信システム、騒音等々、あらゆる方面の技術に精通していた。だから、誰からも頼りにされていた。しかし、彼の方では、彼に対する要求が理に適ったものでなければ、何もしなかった。いかなる問題に対しても彼は自身の意見を持っており、これを述べないで胸の内にしまっておくことは有り得なかった。

真実の追究

哲学という言葉には、智を愛することと、世界や事象などの根本原理を思索によって探求するという意味があるらしい。マークは勿論風力発電における技術知識を愛していたし、未知の技術領域の研究にも協力を惜しまなかった。また、人生観・世界観としての哲学においても、自分の世界を確立していた。彼は、その時代の一流の研究者や技術者たちのほぼ全員と繋がりを持っていて、彼らの支援を取り付けることが出来た。

哲学の場所

マークのお気に入りの場所は、ウインドファームの敷地内に建てた管制棟の中の、窓からウインドファームが一望できる彼の執務室であった。そこは、彼が哲学を行う場所だった。その景色たるや、哲学を行うのに相応しいものであった。朝日に照らされ露が光る風車、夕日に赤く染められる風車、雨の中で静かに佇む風車、モンゴメリーシャーの分厚い雲の色の中に溶込む風車、雪景色の中の荘厳な風車、小さな湖沿いに茂った葦の向こうに見える優美な風車、

そして、放牧されている羊の群れに囲まれて力強く回転する風車...

哲学の題材

幸いなことに、マークが中心となって実地に試験を行い、真実を追究する機会に、私は二度遭遇した。

最初は、サイトで風が吹く主方向、並びに風車列と同じ方角からの風 (Columnar Wind) に対する風車の荷重・応力計測であった。この試験では、どちらの風向でも過剰な荷重・応力は計測されなかった。しかし、風車列と同じ方角からの風向の場合には、風車を一基おきに停止する「ウインドセクターマネジメント」を、恐らく世界で始めて導入した。

二度目は、ウインドファーム建設着工前にコンピューターでモデル化したウインドフローが、各風向において適切であったかを、1年間の実測値と比較し検証する試験であった。その結果は、ウインドフローモデルの予測が 2.4% 高いものであった。膨大な量のデータと格闘し、命題をクリアしたマークのその真摯な姿勢は立派であった。

マークは、その後拝金主義的な彼の雇い主と意見が衝突し、我々の目の前から消えてしまった。

風の未亡人たち

マークの如き情熱を持って風力発電に従事する男たちは、家でゆっくり過ごす時間があまりない。従い、彼の奥さんのような御婦人方は、業界で Wind Widow と呼ばれている。尚、日本では、同業種の人たちが共同して助け合う共済会が変形して恐妻会を形成している事例が知られている。

Wind Bar

引退したら、こんな四方山話で盛り上がる、カウンター形式の一杯飲み屋を経営したいと言っている男が、仲間の中にいた。店のテーマ曲は「Hotel California」で決まりである。(完)